

# おかやまNGOサミット

難民などの支援活動を行っている三十三カ国(日本を含む)のNGO(非政府組織)が参加して岡山市で開かれた「おかやま国際貢献NGOサミット」(アジア医師連絡協議会IAMD AIIなど主催)は五日目の二十四日、倉敷市や加茂川町、広島、沖繩の四カ所

## 地域住民と 交流深める

力について考えた。最終日(二十六日)は東京で既に創設を決めているNGO同士のネットワーク

### 各地で開催

# 食糧問題など勉強 倉敷

倉敷市では、同市福田町「体育館で「ワールドゲーム」古新田の水島緑地福田公園」が開かれた。県下では初の

開催。各国のNGOメンバーと市民たちが、現地住民や国際機関職員に扮さんし、世界各地に暮らす人の立場に立つて食糧問題など地球の未来を考えた。ゲームにはアジア、アフリカなど十七カ国のNGOメンバー二十人と一般応募の約百十人が参加。日本のほか、中近東、インド、中央アメリカなど十地域の住民役と国連、ユネスコなど

五機関の職員役に分かれ、地域や機関名を書いた色画用紙を頭に巻いてゲームにチャレンジした。地域間の距離が正確に把握できるよう工夫された巨大な世界地図(横十一メートル、縦十一メートル)をフロアに広げ、各地域ごとに食糧、エネルギー問題や麻薬、衛生など個別問題の解決策を協議。国際機関から警告や改善勧告も発動され、他地域との

交渉や貿易、世界銀行からの借款などで世界が抱える諸問題の具体的な解決を図っていた。ゲームは日本語が進められ、日本語が理解できないNGOメンバーは一般参加者として身ぶり手ぶりを交えながら英語で意見交換。日本側参加者の大半が初めてであって戸惑いもあったが、「一日ごと、自分の立場でしか国際問題を考えていないのがわかった」「自分の問題として地球のことを考えるきっかけにしたい」などの感想が出ている。

# ジブチ大臣ら6人 昼食や陶芸 加茂川



同町内城の陶芸の里でも備前焼作家の岡本徹正さん(左)の指導で土ひねりをし、思わぬ文化交流を喜んでいた。

シブチ共和国のモハメド・セド・サレー厚生大臣ら五人が加茂川町の町議会議場から「加茂川町の印象は」「シブチ共和国の情勢はどうか」などの質問が相次ぎ、「言葉の壁」を乗り越え予想以上の盛り上がりを見せた。議会でスピーチをした後、町議らの質問に答えたモハメド・セド・サレー厚生大臣は「ソマリアなどから入ってきた難民は現在、一万五千人から二万人いる。難民と先業者が増える大きな問題となっている。医薬品は貴重で、これからも協力、援助をお願いしたい。加茂川町は自然が豊かで庁舎も立派だが、シブチもこうした国にしたい」となると話した。また、一行は町職員らの温かいもてなしに感激した様子。同町下加茂の迎賓館「下加茂」での昼食会には、職員らが腕によりをかけた雑煮や煮しめ、イワナのくし焼き、町でとれた山野草のてんぷらなどがずらり。田原喜を囲み、片山町長らが、加茂川町の食文化を紹介しながら、和やかに懇談。



NGOメンバーと市民が交流しながら地球の未来を考えた「ワールドゲーム」倉敷市古新田